

2022. 10. 16. 主日礼拝説教
聖書：ルカによる福音書9章37～43節
『生き直す力』

「悪霊に取りつかんれた子をいやす」という小標題を以て本日の聖書の箇所は始まります。ルカはこの記事の題材をマルコ9章14～29節を参考に三分の一近く短縮して描き上げました。つまり、全くのルカ文体に変えてしまったというわけです。そして、主題を絞り一層明瞭な古典的奇跡物語の類型を完成させました。

マルコの記事では、あまりにも悪霊に関する記述が質的にも量的にも多いのです。ですからマルコの読者は「悪魔払い」に関する記事であるかのような錯覚を覚えてしまうのです。

どうやらマルコという書記者は、一つの事柄を必要以上に拡大して記述する傾向があるかと考えます。

例えば、この箇所の直前に位置する「イエスの姿が変わる」という箇所(マルコ9:2-13)では、マルコはエリヤをバプテスマのヨハネと同一視して描いています。ですから同一の箇所(ルカ9:28～36)でルカはマルコ版エリヤを削除して、代わりにイエスとエリヤの対比に置き換えています。

ルカはこのように荒削りなマルコを補足しながら描き進めて行くような部分があるのです。

さて、今日の物語は一人の父親が一人息子の救済を訴え出ます。その叫びに対してイエスはいつもの対応とは異なり、嘆きをあらわにされます。「いつまで—あなたがたに我慢しなければならないのか」と・・・。

この「あなたがた」とは一体誰のことなのでしょう。群衆でしょうか。父親なのでしょう。はたまた、悪霊を追い出せなかった弟子たちでしょうか。実は原文でも誰に対してなのかよく分からないのです。

更に悪霊だけが問題なのであれば、このようなイエスの問い返しは必要ありません。即座に悪霊を追い出すことで物語は結論にいざなわれます。

しかし、そうではないのです。イエスが問われることとは、群衆・父親・そして弟

子たちをも引くつるめた課題なのです。それは「他者の痛み」を「自分の痛み」として引き受け、尚かつ、そこに佇むことが出来るかどうかという問いなのです。

他者の痛みを理解するとはどういうことなのでしょう。その人の過去を熟知し、現在を明確に把握し、将来を的確に見通す正確さでしょうか。しかし、そのような正確さであなたを理解したと言われましても一種腹立たしさしか残らないものです。かえって無理解さを味わってしまうのです。

そこに欠けているのは、誤りを赦し、悲しみを慰めてくれる寄り添いとしての引き受けなのです。他者の痛みをおぼえるとは相手をありのまま肯定することです。肯定することが正確な理解を寄り添いへと深めるのです。これらの作業が「生き直す力」なのです。

群衆・父親・弟子たち、誰もが悪霊につかれた「子」の問題として夢疑わないのです。悪霊を取り去れば問題は解決出来ると考えているのです。

例えば、沖縄の基地問題が「沖縄の問題」だと考える人がいるのと同じです。部落差別を部落の問題だと考える人がいるのと同じなのです。

父親はわが子の現実を受け入れられずに人まかせにします。弟子たちもその姿に合点してしまうのです。しかし、イエスは違うと言われます。これは「あなた」の問題だと帰されるのです。そこで悪霊は出て行くとルカは記します。この一連の作業を信仰といいます。